# 給食週間の取り組み

１月２３日から２７日は給食週間でした。健康第一委員会の活動を中心に、調理員さんに感謝の気持ちを持つための取り組みを行いました。１月２５日の集会では、テレビ放送で食べ物についてのクイズや調理員さんへのインタビュー、残りが多いメニューの栄養についての放送をしました。また、普段なかなか見ることができない給食調理の様子を知ってもらうために、給食ができるまでの動画を給食時間に放送しました。子どもたちは、給食室の大きな器具やたくさんの野菜の量に驚きながら動画を見ていました。各クラスでは、給食に感謝の気持ちを表すためのめあてを決め、実践しました。給食への関心が高まり、調理員さんへ心を込めて挨拶をしている児童が多くいました。苦手な物でも食べようと頑張っている児童も多く、給食室で「今日は野菜を食べたよ」「魚は苦手だけど少し食べたよ」等と話してくれました。できあがるまでに多くの人が関わっているのは、給食だけでなく家庭での食事や外食でも同じです。給食週間の取り組みを機に、食事のとり方やマナーについて見直し、よりよい食べ方ができるようになるといいですね。

調理員さんへのインタビューでは、実際に調理で使っている器具を見せてもらいました。

１月２４日の給食は、給食の始まりを知る献立として、自分で作る「セルフおにぎり」でした。

# 児童支援専任より

子どもたちは、給食週間で、自分たちの手元に給食が届くまでに、どれだけの人々が関わり、力を尽くしているのかを知る機会となりました。給食の調理員さんをはじめ、食材の生産、運搬等にも多くの人が関わっています。普段、気付かないところで、自分たちの生活を支えてくれている人がいること。このことは、給食だけに限らず、学校生活、そして社会を生き抜いていく上でも同じことが言えると思います。

大正末期から昭和初期にかけて活躍した童話詩人の金子みすゞさんの「星とたんぽぽ」という詩を紹介します。

**星とたんぽぽ**

**青いお空のそこふかく、**
**海の小石のそのように、**
**夜がくるまでしずんでる、**
**昼のお星はめにみえぬ。**
**見えぬけれどもあるんだよ、**
**見えぬものでもあるんだよ。**

**ちってすがれたたんぽぽの、**
**かわらのすきにだァまって、**
**春のくるまでかくれてる、**
**つよいその根はめにみえぬ。**
**見えぬけれどもあるんだよ、**
**見えぬものでもあるんだよ。**

出典『わたしと小鳥とすずと―金子みすゞ童謡集』
JULA 出版局(1984/8/30)

私たちは普段、真昼の星や、散って枯れたたんぽぽの根のことを考えたり、思いを馳せたりすることは、なかなかありません。しかし、見えないけれど真昼の空にも星が、そして、地中奥深くには根が這っています。私は、この詩を読むたびに、目に見えないところにもある、たくさんの人々の思いや優しさ、努力、支え等を感じずにはいられません。詩の本質は、言葉で書かれていない行間にもあります。

子どもたちには、言葉で伝えることの大切さについて声を掛けていますが、見えないけれど、その状況から「相手の気持ちを想像すること」「気持ちを汲み取ること」も必要なことだと思います。子どもたちがより多くの気付きを得て、成長できるよう、支えていきたいです。

お気付きのことがありましたら、いつでもお声掛けください。